

日蓮大聖人御書全集

みょうしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

びょうしろうやく こと

(病之良薬の事)

新版
1962
〜
1964

みょうしんあまごぜんごへんじ

びょうしろうやく こと

妙心尼御前御返事 (病之良薬の事)

けんじがんねん

がつ にち

さい くぼのあま

建治元年('75) 8月16日 54歳 窪尼

淡 柿 ふたこ 茄 子 ひと籠 た そうら お

あわしがき二籠・なすび一こ、給び候い了わんぬ。

にゆうどうどの ごしよろう どうど こうてい へんじやく もう

入道殿の御所労のこと。唐土に黄帝・扁鵲と申せし

医 てんじく じすい きば もう 医

くすしあり。天竺に持水・耆婆と申せしくすしあり。これ

よ 宝 まっだい 医 し ほとけ もう

らは、その世のたから、末代のくすしの師なり。仏と申せ

ひと 似 医

し人は、これにはにるべくもなきいみじきくすしなり。こ

ほとけ ふし くすり 説 たま いま みょうほうれんげきよう ごじ

の仏、不死の薬をとかせ給えり。今の妙法蓮華経の五字

ごじ えんぶだい ひと やまい ろうやく

これなり。しかも、この五字をば「閻浮提の人の病の良薬

説

そつら

にゆうどうどの

えんぶだい

うち

にほん

なり」とこそとかれて候え。入道殿は、閻浮提の内、日本

こく ひと

み やまい 受

そつらう

やまい ろうやく

国の人なり。しかも身に病をうけられて候。「病の良薬

きようもんけんねん

なり」の経文顕然なり。

うえ

れんげきよう

だいいち

くすり

波琉璃おう

もう

あくおう

その上、蓮華経は第一の薬なり。はるり王と申せし悪王、

ほとけ

親

によにんごひやくよにん

ころ

そつら

ほとけ

あなん

仏のしたしき女人五百余人を殺して候いしに、仏、阿難

せつせん

遣

しょうれんげ

取

寄

み

触

たま

を雪山につかわして、青蓮華をとりよせて身にふれさせ給

蘇

しちにち

とうれてん

う

いしかばよみがえりて、七日ありて忉利天に生まれにき。

れんげ

もう

はな

とく

はな

そつら

ほとけ

蓮華と申す華は、かかるいみじき徳ある華にて候えば、仏、

みようほう

譬

たま

妙法にたとえ給えり。

ひとし

病

とうじ

巻岐

また、人の死ぬることはやまいにはよらず。当時のゆき・

対馬

者

やまい

皆

蒙古びと

つしまのものども、病なけれども、みなながらむこ人に

いちじ

打

殺

やまい

し

ふじよう

一時にうちころされぬ。病あれば死ぬべしということ不定

なり。

病

ほとけ

おん計

また、このやまいは仏の御はからいか。そのゆえは、

じようみようきよう

ねはんぎよう

やまい

ひとほとけ

成

由説

浄名経・涅槃経には、病ある人仏になるべきよしとか

そうろう

やまい

どうしん

発

そうろう

れて候。病によりて道心はおこり候なり。

いつさい

やまい

なか

ごぎやくざい

いつせんだい

ほうぼう

また一切の病の中には、五逆罪と一闡提と謗法をこそ、

重

やまい

ほとけ

到

たま

いま

にほんこく

ひと

ひとり

おもき病とは仏はいたさせ給え。今の日本国の人、一人

ごくだいじゅうびよう

だいほうぼう

じゅうびよう

いま

もなく極大重病あり。いわゆる大謗法の重病なり。今の

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

りつしゅう

しんごんし

やまい

禅宗・念仏宗・律宗・真言師なり。これらはあまりに病

重

わみ

覚

ひと

知

やまい

おもきゆえに、我が身にもおぼえず、人もしらぬ病なり。

やまい

告

しかい

兵

きた

この病のこくするゆえに四海のつわものただいま来りな

おうしん

ばんみん

沈

生

見そうら

ば、王臣・万民みなしずみなん。これをいきてみ候わん

眼

徒々

そうら

まなここそあだあだしく候え。

にゅうどうどの

こんじよう

甚

ほけきよう

ごしんよう

み

入道殿は、今生にはいたく法華経を御信用ありとは見

そうら

かこ

しゆくじゅう

故

催

候わねども、過去の宿習のゆえかのもよおしによりて、

長 やまい

沈

ひびよよ

どうしん

隙

無

こんじよう

このなが病にしずみ、日々夜々に道心ひまなし。今生に

造 たま しょうぎ 消 そうら ほうぼう

つくりおかせ給いし小罪は、すでにきえ候いぬらん。謗法

だいあく ほけきよう き たも

の大悪はまた、法華経に帰しぬるゆえに、きえさせ給うべ

りようぜん 詣 たま ひ出 じっぼう

し。ただいまに靈山にまいらせ給いなば、日いでて十方を

見 嬉 疾 死 打

みるがごとくうれしく、「とくしにぬるものかな」と、うち

喜 たま そうら

よろこび給い候わんずらん。

ちゆうう みち 出 来 そうら にちれん

中有の道にいかなることもしできたり候わば、「日蓮が

弟子 名乗 たま にほんこく

でしなり」となのをらせ給え。わずかの日本国なれども、

相 模 どの 内 者 もう 左右 畏

さがみ殿のうちのもものと申すをば、そうなくおそるること

そうろう にちれん にほんだいいち 不 当 ほっし ほけきよう しん

候。日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華経を信

そうろう

いちえんぶだいいいち しょうにん

な じつぼう

じ候ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の

じょうど

聞

さだ

てんち

知

にちれん

でし

浄土にきこえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子と

名乗

たま

あつきとう

知

由

なのらせ給わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよし

もう

思

たびたび

おんこころ

もう

は申さじとおぼすべし。さては度々の御心ざし、申すばか

きょうきょうきんげん

りなし。恐々謹言。

はちがつじゅうろくにち

にちれん

かおう

八月十六日

日蓮

花押

みょうしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

猿

き

頼

うお

みず

によにん

夫

さるは木をたのむ。魚は水をたのむ。女人はおとこを

別

惜

故

髪

剃

袖

墨

染

たのむ。わかれのおしきゆえにかみをそり、そでをすみにそ

めぬ。いかでか十方じっぽうの仏ほとけもあわれませ給たまわざるべき、

ほけきよう

捨

たも

たま

たま

法華経もすてさせ給たまうべきと、たのませ給たまえ、たのませ給たまえ。